

【中学校部門 優秀賞】

私の家族をつなぐ、大切な食事

大淀町立大淀中学校 1年 永井 彩加里

私の母は、食事を一人だけでは絶対にとらせないので。幼いころからずっとそうでしたので、一人で食事をとる寂しさを、私は知りませんでした。だから、温かいご飯を、家族と笑い合っって食べる大切さを知ったのは、やっと中学生になってからでした。中学生になった私は、テレビで一人でコンビニの食事をとる小学生の映像を目にしました。その時やっと、分かったのです。それまで当たり前家族と食事がとれていたのは、家族のおかげであり、みんながみんな私と同じような食事はしていないものだ。そして、母がつくってくれた温かく心のこもったご飯は、その日から、前よりも私にとって大切な食事になりました。

私の父と祖母、祖父は自営業で漬け物を作り売っています。祖父は米や野菜も家族のためにつくってくれています。実は、私は前まで、父たちの仕事を友達に言うのは、はずかしくて言えませんでした。それは、みんなの親とちがい、古く、伝統的なものをつくっていることです。キラキラした仕事ではありません。しかし、成長するにつれ、古くからの伝統を伝える父たちの仕事に誇りをもちはじめました。決してキラキラした仕事ではないけど、お弁当の隅にチョコっと漬け物があるということは、父たちのおかげだということにやっと気づきました。

私の家族はキラキラとはしていないけれど、地味でも、すごく大切な食文化でつながっています。食は食べるだけでなく、大切な家族をつなげ、温かくしてくれるものです。小さいころは気づけなかったけど、中学生になった私は、自分の父と母、祖父と祖母に誇りをもち、感謝しようと思いました。他人から見れば、地味だし、もしかしたら漬け物がきれいな人もいるかもしれません。でも、日本の食文化をつなぐ家族は、今では感謝しかありません。食という大切なことを私に教えてくれたのは家族でした。